

(雅歌1:16～2:2)ここでは、ソロモンとシュラムの娘の間に交わされた愛の歌、つまり花嫁と花婿の美しい関係が書かれています。ここから私たちの花婿であるキリストと花嫁となるべく教会、この間にある愛を教え学ぶことができるのです。そしてここには4つの花嫁の告白があります。①「私はシャロンのサフラン、谷のゆりの花。」(2:1) シャロンにはどこにもサフランが見られます。そのように私は特別に秀でている人間ではありません。極々平凡な弱い罪深い人間ですと花嫁が花婿に語っています。谷のゆりの花も同じです。「私の愛する方。あなたはなんと美しく、慕わしい方でしょう。私たちの長いすは青々としています。私たちの家の梁は杉の木、そのたるきは糸杉です。」(1:16、17)そしてこのようなつまらない人間をあなたはこんなにすばらしい新居に迎え入れてくれるのは何という感謝で恵みでしようといっているのです。(1コリ1:26～2)ある者をない者のようにするために無に等しいものを選ばれたとパウロも言っています。自分の醜さに気付かなければ、罪に気付かなければ神の愛の大きさには気付くことはできません。私たちがこの事に気づき神様を見たとき、聖められキリストの花嫁として整えられていくのです。②「私の愛する方は私のもの。私はあの方のもの。」(2:16) 私の愛する方、つまり花婿は私のもの、これは自己中心の愛です。キリストを信じて喜んでいるのですが、自分という存在が大きく、その中にイエスを迎え入れているという愛の告白です。信仰の初期にはこのような姿がよく見られます。(ルカ10)マルタとマリヤの話が出てきます。マルタは、自分がこんなに忙しくしているのに助けようもしないマリヤにうっぴんがたまり、そのうっぴんがイエス様に向かいました。そして「妹に手伝うように教えてください」とイエス様を自分の願望を成就するために用いているのです。自己の中に見出すキリスト、あなたにはこういうところがないでしょうか。自分が大きな存在でイエス様が心の隅に小さい存在になっていないか考えなくてははいけません。③「私は、私の愛する方のもの。私の愛する方は私のもの。」(6:3) 2つめの告白と似ていますが、順序が逆になっています。これはキリストの中に見出す自分なのです。初めは②の状態であってもだんだん清められ御言葉に養われ、聖霊に導かれる中で、自己が小さくなり、キリストが大きくなりこの3つめの告白の姿になるのです。愛は成長するものでなくてはなりません。愛は名詞ではなく動詞なのです。誰かに対して愛が芽生えたら動かすにいられない、成長せずにはいられないものです。いつまでも同じ状態ではいけません。愛は深められていくべきです。④「私は、私の愛する方のもの。」(7:10)「私のもの」がなくなった、つまり無私の状態です。自分がどんどん小さくなり、キリストがどんどん大きくなり、キリストが全てとなるということです。パウロも生きるのも死ぬのも主のものだ(ローマ14:8)と告白しています。こういう信徒になろうではありませんか。しかし一朝一夕になるものではありません。毎日祈り、御言葉を読み、聖霊の力を受け、清められて行くときにこのようになります。エステルはハマンのユダヤ人抹殺の直前に、自分の命をかけ、自分は自分のものではない、キリストのものだと愛が成長していきました。キリストの愛が私たちに支配するときに神様の栄光を表すことができるのです。私たちは色々なところで自我が出てきます。キリストの愛にもう一度ふれてもう一度告白しましょう。私たちはこの地でイエス様の花嫁として備えられています。純白はちょっとのしみでも汚れでも目立ってしまいます。赦されなくてはならない罪があるならば清めてもらってください。そしてイエス様を愛すると言うことはまず、自分がどんなに醜いものか気がつかないとわからないのです。十字架に表された愛は、自分がどんなに罪深い人間かわかったときに、その神様の愛の大きさがわかるようになるのです。自らを見つめて小さな自分の罪も、神様の喜ばれない考えも思いも清められ神様の前に花嫁として整えられていく必要があります。神様の愛に感謝して私たちのうちにあるキリストが全て支配してくれ自分の中のキリストから、キリストの中の自分、そしては、すべてがキリストとなるように、歩んでいきましょう。(要約者：岩崎祥誉)